

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第793号 平成26年8月26日

不登校の始まり

学校の夏休みも終わり、子ども達の元気に登校する様子が見られるようになりました。

通学路を子ども達に追い抜かれたり、追い抜いたりしながら出勤するのは楽しいものです。

しかし、子ども達にとっては、長い夏休みが終わった後、改めて普段の学校生活に戻るの簡単ではありません。大人だって、何日間か休みを取ってのんびりしてしまうと、「出勤するのは億劫だな～」と感じる事があるはず。子ども達はなおさら、長い夏休みが終わったからといって、一拳にギアチェンジして生活のリズムを変えるというのは、大変だと思います。

先日（8月7日）、文部科学省は2013年度（平成25年度）に病気や経済的な理由以外で年間30日以上欠席した「不登校」の児童生徒が、全国で11万9617人（道内では、4052人）と、6年ぶりに増加に転じたことを明らかにしています。

「学校には行きたくなければ無理して行く必要はない」とお考えの方もおりますが、私は、学校に通っている子ども達が何らかの理由で学校に通えなくなるというのは、不正常だと思っています。

文部科学省では、不登校になった生徒の5年後の状況を追跡調査しており、去る7月に、同省の「不登校生徒に関する追跡調査研究会」が「平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書」を公表しました。

それによると、何時頃から学校を休み始めたかについて、休み始めた学年は中学1年生と中学2年生の時期が最も多く、また、休み始めた時期は全体を通じて夏休み明けの7月～9月に集中している事を明らかにしています。

この結果について、研究会では夏休み期間中の「生活リズムの乱れ」が不登校のきっかけになっている可能性が高いと分析しています。

子ども達にとって、夏休みは「学校を休めて楽しい」という事かも知れませんが、いくら夏休みといえども、楽しい時間を過ごすだけでは後が大変という事だと思います。

普段は朝早く起きる子でも、休みになると寝坊してしまうという事は良くありますが、親の方も、夏休みだからとつい甘くなりがちです。また、ゲーム等に興じる

時間も長くなり、昼夜逆転の生活になってしまう子も少なくないようです。

このように、夏休み等長期休業期間中は家庭での時間管理がルーズになりがちで、しかも、一旦乱れた生活リズムを元に戻すのは大変です。

このため、保護者が時間管理の重要性を良く認識していただいて、夏休みをどう過ごすか子どもとも良く話し合い、それぞれの家庭の中でルールを決めておく事が望ましいと思います。

夏休みが楽しければ楽しい程、学校に行くのが億劫になるのは仕方のない事です。夏休みが明けたからといって、急に子どもの尻を叩いても、エンジンはそう簡単にかかりません。

先程も述べた様に「学校に無理に行かせる必要はない」と考える人もおりますが、私はそうは思っておりません。だからといって、首に縄を付けて学校に行かせる事等は出来ませんし、学校に行く事を強制しても問題が解決する訳ではありません。

不登校の原因は様々ですが、少なくとも、生活リズムの乱れを背景とするような不登校は、家庭と学校がしっかり連携すれば防ぐ事が出来るはずです。

一旦不登校になってしまった場合は、不登校を生まないための努力の何倍ものエネルギーを必要としますので、不登校の芽を摘むために最善を尽くすべきです。

研究会の調査結果によると、かつて不登校だった児童生徒の38.9%が「学校に行けばよかった」と、学校に行かなかった事を後悔しています。そんな後悔を子ども達にさせてはいけません。

私は毎朝、元気に登校する子ども達の後姿を追いながら、彼等がこれからも健やかに成長してくれるよう、少なくとも、元気に登校する子ども達を横目に見ながら家に引き籠ってしまうような事のないよう、祈っています。(塾頭：吉田 洋一)